

耕種農家の堆肥利用実態と課題

[研究のねらい]

未利用有機物の堆肥化や堆肥施用技術の開発をスムーズに進めるには、堆肥を使う側である耕種農家の堆肥利用の実態とニーズの把握が必要となります。アンケートをもとに耕種農家の堆肥利用上の問題点や利用拡大の課題を明らかにします。

[研究の成果]

- ①農家の利用した堆肥の種類で最も回答が多かったのは「家畜ふん堆肥」(回答率61%)で、次いで多かったのは、「パーク堆肥」(45%)、「ワラ・落ち葉・畦畔の草」(31%)でした。
- ②10a当たり堆肥施用量は、施設園芸部門(野菜・花き・果樹)と露地花き部門で平均1~2tですが、露地の果樹、野菜部門等では平均1t未満と少ない結果となりました(図1)。
- ③堆肥を利用するうえでの問題点は「散布に労力がかかる」、「価格が高い」、「品質が不安定」、「置き場所がない」、切り返しや運搬のための「機械・装備がない」等でした(図2)。
- ④耕種農家での堆肥利用は今後拡大することが予想されますが、そのためには価格の低下、肥料成分表示、土壌診断、散布しやすい形状への加工、熟度判定や施用技術の指導などが必要となっています(図3)。

[成果の活用面・留意点]

- ①耕種農家の堆肥利用拡大を指導する図る際の情報として活用できます。

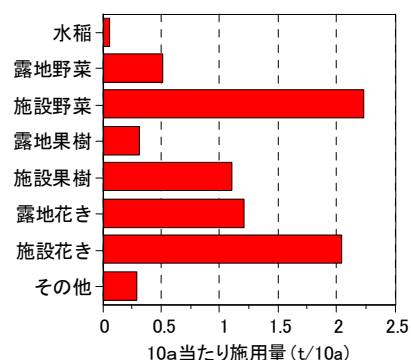


図1 栽培部門別10a当たり堆肥施用量
注)回答農家の平均値を示しています。

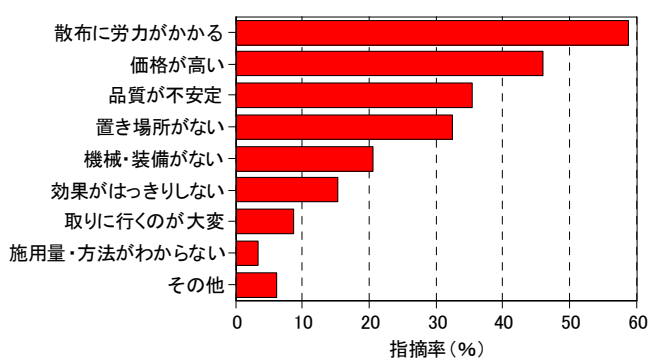


図2 堆肥利用上の問題点

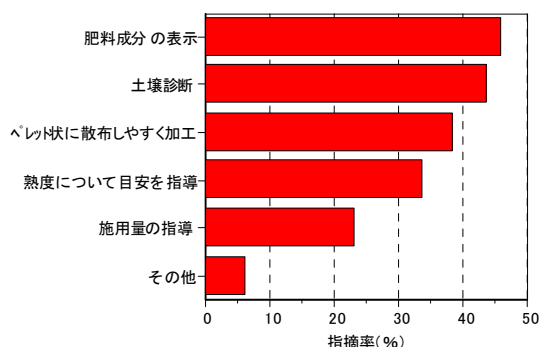


図3 今後の堆肥利用等に関する希望

和歌山県内の耕種農家 に対するアンケート(2000年10月~11月実施、有効回答数 358、回収率72%)をもとに作成しました。

実施期間：平成11~15年度

担当者：辻 和良、西岡晋作、光定伸晃